第２回　北里地区の学校を考える会委員　議事録

| | |
|---|---|
| 日　　時 | 令和８年１０月４日（日）　１０時　～１２時００分 |
| 場　　所 | 小牧市北里市民センター　講堂 |
| 出 席 者 | 【委　員】<br>別紙のとおり<br>【事務局】<br>中川　宣芳　教育長<br>矢本　博士　教育部長<br>長谷川隆司　教育部次長<br>丸藤　卓也　教育総務課長<br>瀬尾　宗利　学校教育課指導主事兼主幹兼教育総務課主幹<br>長屋　孔之　教育総務課学校再編推進係長<br>丹羽　勇人　教育総務課学校再編推進係主査<br>稲垣　翔太　教育総務課学校再編推進係主任<br>【講　師】<br>加納　誠司　愛知文教大学　教授 |
| 欠 席 者 | 佐野委員、酒見委員、山本委員 |
| 傍 聴 者 | ２２人 |
| 配布資料 | 資料１　第１回「考える会」の振り返り<br>資料２　学びや生活、探究の基盤をつくる小中の一貫教育をめざして<br>～北里地区の強みを生かした一貫教育を考える～<br>資料３　北里地区の学校再編に関する今後の取組について |

内　容

**１　開会**

【会長】

・お忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。

・第１回の会では、北里地区の学校を取り巻く現状や課題について共有したところだが、本日、第２回では、大学教授をお招きし、小中一貫教育についてご講演いただく。

・私立の学校などで「中高一貫教育」のイメージはできる方も多いと思うが、義務教育における「小中一貫教育」について、強みや課題をご説明いただけると思うので、私自身、本日の内容を今後の議論の糧としたいと思うが、委員や傍聴の皆様がお聞きになられた内容を家庭やご近所の方とも共有いただくことで、この「考える会」の価値がさらに高まると考える。

・本日はよろしくお願いします。

２　議題

（１）前回の会議の振り返り

事務局より資料１に基づき、説明を行った。

（２）基調講演

愛知教育大学　教授　加納　誠司　氏より資料２に基づき、講演をいただき、以下のような質疑応答を実施した

【委員１】

・アクティブラーニングの必要性や重要性については、ご講演のとおりと思うが、それらを小中一貫教育にどのように結び付けていくのか、小中一貫教育でなければできないことがあれば教えていただきたい。

・また、小中一貫教育の中でも、例えば、現在の小学校と中学校が分離している状況のままでも小中一貫教育はできるのではないか。

【加納教授】

・小中一貫教育でないとアクティブラーニングの取組ができない、ということではないが、義務教育９年間の連続性や小中の児童生徒や教員同士が同じ空間で連携・協力して行うことで取組の質が高まると考えている。

・また、ご指摘の施設分離型の小中一貫校も多くの事例があり、既存の校舎等をそのまま活用することができることからコスト面でのメリットがあるが、北里地区においては学校施設の建替えを前提とされていることから、今後、北里地区にとって望ましい小中一貫教育のあり方を模索することができると考える。

【委員１】

・進学の際の通過儀礼がなくなることも課題だと思う。

・また、中１ギャップの話もあったが、「壁」を取り払うことばかりではなく、中学校等への進学という「壁」を超えられる人物を作っていくことも教育ではないかと思う。

【加納教授】

・壁がなくなることが必ずしもいいことではないということは、ご意見のとおりである。

・行事のあり方や個々の発達に応じた教育のあり方、義務教育学校でいうところの７年生への意識付けは特に大切であり、常に考え続けていく必要がある。

【委員１】

・小中一貫教育は、既存の取組の質や効果を高めるための手法であり、「小中一貫教育でないとできない」という類のものではないと理解した。

【委員２】
・長年、区長やボランティア活動を通して、それぞれの学校と関わりをもってきたが、北里の３つの学校はいずれも地域と深く関わりを持ちながら、学校運営をされる非常に良い学校だと感じている。
・また、講師の先生からは小中一貫教育のメリットやデメリットなどを正直にお話いただけたと感じており、今日のお話を聞く限りでは、北里地区の小中学校が一緒になれば、これまで培ってきた北里地区の教育的な強みがスムーズに継承されていくように思う。
・お聞きしたいのは通学の関係で、小木小学校が廃校になると、子どもたちはこれまでと違う通学路を、地域によってはこれまでの以上の距離と時間を歩いて通わなければならなくなるという点についてである。
・こどもたちの通学の安全性をどのように守っていけばいいのか、いかにして新しい学校に通わせるか、通学支援策の導入なども踏まえ、どのようにお考えか。

【加納教授】
・通学の安全について自身の専門内で事例を紹介させていただくと、例えば小学校１年生のうちに「通学路探検」と称し、普段、歩いている通学路に危険な場所がないか、という視点で歩きなおしてみることで、危険個所を意識することに加え、普段、通学路ボランティアや地域の人たちに見守られながら通学している、ということを感じることができる機会を設けるなどの取組をされている事例がある。
・また小中一貫校の中には小学校１年生から中学校３年生までが一緒に下校する機会を設ける事例もあり、上級生の責任感や下級生の安心感を育むのに良い取り組みだと感じた。

【委員２】
・ソフト面のことはもちろん、教育委員会においては、学校再編まで時間もあるので、通学路の整備や横断歩道・歩道橋などの設置についても、計画的に検討をお願いしたい。

【委員３】
・小学校から中学校に進学した際、小学校の勉強の内容でわからないところがあると、中学校の勉強についていけず、結局それを補うために塾などに通うことになる。
・経済的な面でできない家庭もある中、例えば、小中一貫校において、小学校の内容を学びなおしたい生徒が小学校の教員から補習できるような機会は御校（愛知教育大学名古屋付属中学校）では設けているのか。

【加納教授】
・現在はそうしたことまでは実施できていない。

【委員３】
・高校生であれば自身の学力と学びたい内容に応じて、自身で進路を決めることになると思うが、小中学生のうちはそれぞれの特性や習熟度に応じながらも、基礎的な学力をしっかりと身につけていく必要があると考える。

【委員４】
・小学校と中学校と授業の時間が異なるが、例えばチャイムについては小中一貫校ではどのようになるのか。
・また、授業の時間が異なることで、例えば中学生の授業中に小学生が休憩や放課で騒がしくしていると、勉強に集中できなかったり、逆に休憩中にのびのびと遊べなくなるのではないかと危惧する。

【加納教授】
・小中一貫に関わらず、学校によってはノーチャイム制を導入されている事例もあると承知しており、その狙いは「時計を見たり、時間を意識しながら行動ができる」という点にあると思われる。
・また、2030 年からの新学習指導要領では教育課程の範囲内で、事業時間を自由に設定できるような仕組みも導入される予定であり、そうした部分や休憩や給食の時間の工夫などで課題解決を図ることも考えられる。

**（３）今後の進め方について**
**事務局より資料３に基づき、説明を行った。**

【副会長】
・以上をもって、本日の議題は全部終了した。進行を事務局にお返しする。

**３　閉会**